

[連載]

技術教育研究会と私の歩み

21

佐々木 享

『技術科の授業を創る』の刊行

河野義顕・大谷良光・田中喜美編著の『技術科の授業を創る——学力への挑戦』(1999年、学文社)は、形式的には3人個人の編著であるが、実質的には技術教育研究会の最近の集団的な労作といってよい。改訂学習指導要領が技術科の授業時間を大幅に削減し、そのうえ技術教育とはいえないコンピュータの操作学習をこの教科に押しつけてくるという危機感の中で、集団討議を経た私たちの考えと実践の方向を積極的に提示したものである。技教研はこういうものをまとめ得る力量をもつに至ったというのが私の感慨である。

技術教育研究会

創立40周年記念パーティーに参加

2000年1月8日には、東京のエミールを会場として、技術教育研究会の創立40周年記念祝賀パーティーが開催された。参加者38名の中には創立発起人の一人である原正敏先生はじめ、同じく40年前の創立総会に出席した幡野憲正、村田昭治氏ら昔からの仲間の顔があった。1960年1月に27歳で創立総会に参加した私が満67歳になり、多くの仲間に支えられて発展してきたこの研究会の40周年を祝うとは夢のようだった。

このパーティーの参加者に技教研創立当時まだ生まれていなかった人をふくめて若い人が多かったことは、会の未来が豊かなものであることを示唆する嬉しいことだった。

私たちの技術教育研究会は、20周年、30周年と節目節目にいわば几帳面に記念の集いを開催してきた。それはたんに運動の発展を祝うにとどまらず、節目を機会に私たちの活動自体が運動の歴史の渦中にあることを確認しあう意味をもっていたように思う。ことに今回は20世紀最後の年の催しであったから、その意味で格別の意義をもっていたように思われる。それにしても、私個人にすれば50周年に立ち会える可能性があるとは思えないから、この集いに参加できたことの感慨は一入だった。

技術教育研究会の歴史年表などについて

(限られた紙幅だから、すでに40年の歴史をもつ技術教育研究会の活動だけでも書くべくして書き残したことは無数にある。何より、毎年充実した研究討議を重ねている夏の大会やおりおりの課題を取りあげてきた春の公開研究会、それに夜遅くまで特定のテーマについてみっちり討議する合宿研究会については、ほとんど全く触れなかった。それなのに私事を書き込んだので、読みづらいものになったと反省している。

基礎的な資料であることを承知しながら、触れはじめると切りがなくなるので、会報『技術と教育』や雑誌『技術教育研究』についても初期をのぞきほとんど言及しなかった。これらについては、技術教育研究会は節目節目に総目録を作成していることを紹介しておく。

技術教育研究会の40年間にわたる活動につ

いては、河野義頭氏による驚くべき克明な「技術教育研究会年表」が『技術教育研究』の第56号(2000年7月)と第57号(2001年1月)に掲載されている。この年表は、将来技術教育研究会の活動を総括するさいの基礎的資料ともなると思われる。私が書き残したたくさんの事項については、これを参照しながら、『会報』や『技術教育研究』そのものを参照して下さいようお願いしたい。

歴代事務局長のこと

ここまで書きついできて気がかりなことの一つは、技教研の歴代の代表委員については言及したのに、筆の流れの都合から、若干の人をのぞいて、つねに技術教育研究会の活動の先頭にあって献身してこられた歴代事務局長についてはあまり触れなかったことである。ここではお名前と在任期間を掲げてお詫びしておきたい。

1. 原 正敏 (1960～1970年8月)
2. 佐々木 享 (1970年8月～1976年8月)
3. 河野 義頭 (1976年8月～1982年8月)
4. 依田 有弘 (1982年8月～1987年8月)
5. 長谷川雅康 (1987年8月～1991年8月)
6. 田中 喜美 (1991年8月～1996年8月)
7. 齊藤 武雄 (1996年8月～2000年8月)
8. 大谷 良光 (2000年8月～現在)

この連載では触れる機会を逸した依田有弘事務局長は、規模が大きくなり、活動範囲が広くなったら当然と考えられる業務を分担するシステムを導入し、事務局長も中堅の人たちで適宜に交替しようと提言した。その意味では技教研の仕事は依田事務局長の時期から近代化したと言えるのかも知れない。依田氏はものごとを深く考えるひとだが、技教研では筆の遅いことで知られている。私は、聞いてもすぐ忘れてしまうことが多いので、鉄鋼

産業における企業内教育調査のために全国の製鉄所、製鋼所まわりなどに何回も同行して頂いたことが記憶に残っている。私の書齋で、依田氏とともに川喜多二郎氏が創案したKJ法を活用してこの鉄鋼産業調査をまとめたことも忘れられない。

依田氏の後を継いだ長谷川雅康氏は、勤務先の東京工大附属工高で現今の「産業社会と人間」に相当するような先駆的な科目の創設をふくむさまざまな意欲的な実践をしていた。またすでに当時から、全国の工業高校の施設設備と実験実習の実態との関係を克明に調査する仕事をしておられた。日本の教育学は事実を客観的に記述するという科学の初歩的というべき面が甚だ弱いので、これは重要なものだった。なお同氏は、その後鹿児島大学教育学部に転任してからも、実験実習の時期的な変化を追跡する点を主眼としてこの仕事を継続しておられる。

【謝辞】

私には塩田庄兵衛という都立大学の学生の頃からの師がいる。先生は私を弟子の一人として扱い、著書ができると贈って下さる。先生の闊達な名文にはそのつど感服させられている。あつかわれている対象のほとんどが近代から現代にかけての日本の平和と民主主義の伝統やそのために苦闘した人びとについての話題だから、較べるのもおこがましいが、塩田先生の文章を読むたびに、ひるがえて自分の悪文に身がちぢむ思いをしている。扱う対象が違う文章でも少しは先生の水準に近づきたいと努力するのだが、非才では足下にも及ばない。そんなつたない文章を掲載し続けて下さった編集部、読んで下さった会員各位に謝意を表してこの連載を終わる。

20
(金)
野、木下
の15
8時
りに
長谷
(1)
田
は、
一、
野榮
の3
会に
(2)
1、
で、
1
各国
は厚
2、
担当
(3)
言
に付
月委
また
をと
な
(4)
の耳
し、
脈=
一と
2、
各
目送
旬